

将来の宮城を担う君たちへのメッセージ

2011（平成23）年3月11日午後2時46分、私は県庁近くで車に乗って信号待ちをしていました。突然、ものすごい横揺れを感じ、すぐに外の景色を見ると、信号機、木、ビルといった目に入るもの全てがユサユサと大きく揺れ、アスファルト舗装の道路が波打っていました。

私は、間違いなくとてつもない大地震が来たことを確信しました。

すぐに県庁4階の知事室に階段を使って戻り、防災服に着替え、5階にある災害対策本部に向かいました。午後3時2分、まだ被害の状況も分からない段階でしたが、躊躇することなく自衛隊へ災害派遣要請をしました。午後3時30分には第1回災害対策本部会議を開催し、被害者の人命救助を最優先とすること、情報収集に努めることを指示したことを今でもはっきりと覚えています。

その後、知事室に戻り情報収集のためにつけたテレビには、次々と沿岸部の街を飲み込んでいく津波の様子が映し出されていました。私の大好きだった本県沿岸の町並みや漁港、そして何代にもわたって営々と耕されてきた田畑等が一瞬にして破壊され、県民の尊い命が失われました。本県だけでも死者10,549人（関連死含む）、行方不明者1,239人（2015〔平成27〕年11月30日現在）にのぼったことは本当に辛く悲しい惨事です。

しかし、ここでいつまでも立ち止まり、嘆き悲しんでばかりいるわけにはいきません。犠牲になった方たちの死を無駄にすることなく、元気な宮城、元気な東北、元気な日本を取り戻すことによって御霊に報いることが後に残された私たちの使命です。

本県は、今回の東日本大震災のちょうど400年前の1611年にも慶長三陸地震によって津波の襲来を受け、仙台藩領内では1,783人が犠牲になったという記録が残っています。当時の仙台藩主・伊達政宗公は、現在のような手厚い中央政府（幕府）からの支援がない中で、災害対応に追われながら産業振興に力を注ぎ、被災からわずか2年後の1613年には支倉常長らの使節団を欧州に派遣して海外との交流を進め、地震と津波で大きなダメージを受けた仙台藩のピンチを、発展の礎というチャンスに変えてみせました。

現在の私たちにもそうした気概が必要です。

私の座右の銘は、「天命に従って人事を尽くす」です。普通は「人事を尽くして天命を待つ」ですが、私はどんな人間にも必ず世の中のお役に立つ天命が神から与

えられていて、それを自覚し一生懸命職分を尽くすことによって幸福感を味わうことができると思っています。

今回の大震災当初、私が最も恐れたのは暴動や略奪行為でした。しかし、あの辛く苦しい発災直後の状況の中、宮城県の被災者の皆さんは一つのおにぎりを分け合って乗り切ってくれました。

こうした素晴らしい県民のために命をかけることができる私は本当に幸せ者です。これが天命なら私は喜んで宮城県の復興のために命をかけます。

日本にはこれから、かつて経験したことのない急激な少子高齢化、人口減少の時代が訪れます。今回の被災地は、震災前からそうした日本の将来を先取りしていた地域です。本県では平成32年までの「震災復興計画」を策定し、災害からの復旧にとどまらない「創造的復興」を目指し、現代社会を取り巻く諸課題に対応した先進的な地域づくりを行っていますが、こうした新しい日本のモデル構築をしていくことが、温かいご支援をくださった全国の皆様への恩返しになると信じています。

（村井嘉浩著「復興に命をかける」より）

私は、これからも宮城の復興のために県民の皆さんとともに取り組んでいきます。

この防災教育副読本「未来への絆」には、東日本大震災をはじめとした宮城県で起きたこれまでの災害の教訓や災害発生時に必要となる知識や行動など、多くの参考となる教材がまとめられています。

東日本大震災の際は、高校生の皆さんも地域の一員として積極的に避難所運営等のボランティア活動を行ってくれました。

将来の宮城を担う高校生の皆さんが、この副読本を活用し、東日本大震災の教訓を生かした災害への備えに、そして、万が一、災害が発生した際には様々な分野で貢献していくことを期待しています。

平成28年1月11日

宮城県知事 村井嘉浩

